

敦煌写本より見たるチベットの浄土思想受容

赤 松 孝 章

(一)

従来、チベットにおける浄土思想の受容に関しては、西藏大藏經に入蔵されている〈無量寿經〉及び〈阿弥陀經〉のチベット訳を、それぞれのサンスクリット本に比較し、その翻訳過程でのチベットの変容を手がかりとして論じられてきた⁽¹⁾。しかし、つまるところチベットにおいては浄土思想が発展しなかつた、と考えられているのが現状である。それは、浄土思想に直接関係する經典のチベット訳が〈無量寿經〉と〈阿弥陀經〉とに限られ、しかもそれらの注釈書の類が現存しないところに起因するようである。

こうした中で、われわれは、敦煌文献中に〈無量寿經〉と〈阿弥陀經〉とのチベット訳で、漢訳から重訳されたものが存在していることを確認した。その概要はすでに報告したところであるが、前者に関しては、五存七欠といわれるもののうち菩提流志訳の『大宝積經無量寿如来会』から重訳されたものであり、後者は、鳩摩羅什訳『阿弥陀經』からの重訳本

である。これらの重訳本の存在によって、チベット文化圏に漢訳仏教圏からの浄土思想の導入があったことが知られるようになった。

さらに敦煌文献の調査を進めて行くうちに、『無辺光明の国土の功德をヨーガの行者が称讚する (sNan ba mthah yas kyi shin gi yon tan la mal hbyor pas bstod pa)』と題する写本が数点存在していることが確認された。P. tib. 67, P. tib. 99, P. tib. 158, P. tib. 759, S. tib. 452. の五点である。このうち P. tib. 158. は冒頭部分の断片一葉だけであり、他の四点が完本として遺っている。

形式的には、七シラブル、二〇六句の詩頌から成っており、その内容を略説すると次のようになる。

- (1) 1 ~ 16句 帰敬偈
- (2) 17 ~ 29句 著作の動機
- (3) 30 ~ 63句 アミダ仏の功德
- (4) 64 ~ 99句 アミダ仏の国土の功德

敦煌写本より見たるチベットの浄土思想受容（赤松）

- (5) 100 ~ 199 句 アミダ仏の国土に生まれるための修道
(6) 200 ~ 206 句 廻向偈

この文献が敦煌という特殊な地域で発見されたものであるために、チベット本土における浄土思想受容ということと直接結びつけることができるか否か、異論のあるところではあるが、チベット文化圏であった敦煌にこうした浄土思想に関する文献が存在していたことは看過できない問題である。そこで以下、本文献の内容を紹介しながら、いくつかの問題点を指摘してみたいと思う。

(1)

まず著作の動機として

「善逝の功德平等の故に

諸の国土に種々の差別なしと雖も、
衆生の習気不同なるが故に

国土の功德が種々に現る。

それ故無辺光明（「アミダ仏」の

国土の功德を要略して説かん」（17 ~ 22 句）

と述べ、

「その功德は不可思議にして

言葉も説明も及ばずと雖も、

諸の衆生を導かんがために

功德の莊嚴を説かん」（26 ~ 29 句）

とある。この記述より見れば、広大なる仏教教理の中からアミダ仏とその国土を選び出し、もって衆生救済を目的とした著者の意図がうかがわれる。すなわちチベット文化圏に浄土思想を積極的に流行せしめんとした動きのあったことが知られるのである。

続いてアミダ仏の功德について述べるわけであるが、本文献においてアミダ仏は次のように表現される。

。無辺光明 snah ba mthah yas

。吉祥光明 dpal gyi snah ba

。吉祥光焰 dpal gyi hod hbar

。吉祥光焰 dpal gyi hod hbar

。法王光明性 chos rgyal snah ba nid

このように呼ばれるアミダ仏は、「不動なる三昧の海より生じたパドマの上に、四無量の座を敷き、不動に住している」「空性の宮殿は無辺無量であり、六神通の窓は明るく、知らざる見ざるというものはない」「七覺支・十力・四無所畏・三十二相・八十種好を有し、虹のような光明を十方に放っている」と説かれる。ここで注目すべきは、本文献がアミダ仏の寿命無量に全く触れない、ということである。藤田宏達博士は『原始浄土思想の研究』の中で、藏経本のチベット訳（無量寿経）の無量光と無量寿の用例より無量光が主とな

っている点を指摘し、中村元博士のご意見として、チベットに於ては古くからアミダ仏の名前は無量光が固定していたであろうことを挙げておられる。本文献がアミダ仏の寿命無量に言及しないのも、或はチベットのアミダ仏のとらえ方の特色に由来しているのかもしれない。

次にアミダ仏の功德に関して、次の一節が問題となる。

「無言不動の禪定に入っているが

本願の誓いによって

多くの光明を十方に放つ。

それらの光明の一々から

諸の化仏が無数に現れて

無量の有情を解脱させる」(56〜61句)

ここに言われるように「アミダ仏の光明の一々から無数の化仏が現れる」ということを浄土経典の中に求めると(無量寿経)諸本のうち、サンスクリット本、藏経本チベット訳、漢訳『無量寿経』及び『如来仏』の四本に類似した表現が見られる。しかし、そこでは極楽世界の一々の蓮華から三十六百千億の光明が現れ、その光明の中に諸仏が現れる、とされていて、本文献の内容と多少異なる。ところが『観無量寿経』の中により近い記述がある。すなわち第九観にアミダ仏の身相を説くところで、「身諸毛孔、演出光明、如須弥山。彼仏円光、如百億三千大千世界。於円光中、有百万億那由他恒河

沙化仏。……(中略)……念仏衆生攝取不捨」とあり、また同じく第十観に観世音菩薩の身相として「流出八万四千種光明。一一光明、有無量無数百千化仏」とある。この点より、本文献の背景に『観無量寿経』の存在が予想されるわけである。

(三)

64句から99句までにアミダ仏の国土の功德が説かれるが、それに先立つ24句目に「西方幸福の最勝国土」(anub phyoos skyid pahi shin rab)」とあり、浄土経典と同じくアミダ仏の国土を西方に位置づけている。アミダ仏の国土 *sukhāvati* に対応するチベット訳は一般に *bde ba can* であるが、*skyid pahi shin rab* は特殊な用例として注意をひく。

本文献におけるアミダ仏の国土の描写を示すと、次のようになる。

- 。聖ならざるものが住していないから、六道輪廻の名もない。
- 。種々の宝で飾られているから、土と石の名もない。
- 。菩提樹で飾られているから、草木の名もない。
- 。八つの三昧を有する水が流れているから、水の名もない。
- 。智慧の火が燃えているから、世間の火の名もない。
- 。解脱の香のにおいが起こるから、世間の風の名もない。

- 。法輪の光明が放たれるから、太陽や月の名もない。
- 。智慧の光明が放たれるから、昼と夜の名もない。
- 。法王光明性が住するから、王と臣の名もない。
- 。幸福なるさとり道の道を行ずるから、世間の道の名もない。
- 。我と我所の見解がないから、争い闘うという名もない。
- 。三味の食をたべるから、食という名もない。
- 。清浄なる戒律の衣を着るから、衣という名もない。
- 。パドマの上に化生するから、四生という名もない。
- 。生死なき道を修するから、生死の名もない。
- 。一切の幸福なるさとりを行ずるから、不樂の害もない。
- 。これらの描写は（無量寿経）諸本のうち特に後期無量寿経といわれる系統に説かれるところから影響を受けていると思われる。しかし（無量寿経）所説の極樂世界観よりもかなり発展したとらえ方をしていると見える。すなわち（無量寿経）のそれは有形的な表現をもってしているが、本文献では「三昧の水」「智慧の火」「解脱の香」「三昧の食」「戒律の衣」というように、全体的に描象的な表現がめだつ。これが本文献の極樂世界観の特色である。

（四）

続いて64句から119句までに、アミダ仏の国土に生ずるための修道が説かれる。それは次の如きである。

- 。五欲を捨てて出家し、善知識に近づく。
- 。戒律の器に三昧の水を注ぎ、智慧の光明を生ずる。
- 。十不善を捨て十善を行じ、善悪平等の道を修す。
- 。貪瞋癡の三毒を捨て、貪平等の道を修す。
- 。四顛倒を捨て四諦を行じ、無二の道を修す。
- 。無明から生死に至るまでを捨て、無明の法界性を修す。
- 。五蘊は幻であると知り、生滅のない道を修す。
- 。心意識の三つが苦しみの輪廻の因であるから、無分別平等の道を修す。

- 。三界は心と意との顕現であると知る。
- 。一切法は夢であり変化であり陽炎であると知る。
- 。無所縁の食を捨て、清浄戒の器をなす。
- 。忍辱の鎧をつけ、精進の馬に乗り、
- 。禪定の弓をひき、智慧の矢を射ち、八識の怨敵を殺す。
- 。菩提分によって平等性の道を修す。
- 。無住の精舎と無貪の箒と取捨のない忍辱を行す。
- 。大いなる慈悲を起す。

さらに「分別の心があるからそこ（アミダ仏の国土）に行かない。三界に於て無所縁であり寂靜にも住しないのが国土の自性である」「分別によって理解せず、無分別が聖者の境界である。所縁によっても無所縁によっても涅槃しない。所縁・無所縁が平等であること、それが法界性である」と説か

れる。ここで注目すべきは、中観・唯識の思想が大いに取り入れられていることである。

チベットの仏教綱要書によって、チベットには「瑜伽行中観派」という学派のあったことが知られるように、チベットにおいて中観・唯識は重要な教学的位置を占めていた。本文のタイトルには、「無辺光明の国土の功德をヨーガの行者が称讃する」とあり、また今まで述べてきたように内容的にも中観・唯識の思想的影響の強いことを考え合わせると、本文が「瑜伽行中観派」的立場から著述されたのではなからうかと想像されるのである。しかしこの点に関しては、改めて検討しなければならないであろう。

さらにもう一つ問題となるのは、178、179句に説かれる一節である。そこでは「無分別において名を唱え、ならば、(misshan brijod na) 無数劫の罪を清浄にする」とある。(無量寿経) 諸本では、アミダ仏を「随念する」或は「作意する」という意味で説かれることはあっても称名としては示されない。ところがこれも「観無量寿経」に同趣旨の表現が見い出される。すなわち九品往生を説く中、下品上生の段に「称仏名故、除五十億劫生死之罪」とあり、下品下生の段には「称仏名故、於念念中、除八十億劫生死之罪」とある。したがって先に述べた「一々の光明の中に阿弥陀仏の化仏が無数に現れる」ということとあわせて、本文の著作にあたって『観無量寿

経』が依りどころの經典の一つに加えられていたのではないかということが大いに予想されるわけである。

(五)

以上、敦煌本『無辺光明の国土の功德をヨーガの行者が称讃する』と題せられる写本を資料として、チベットの浄土思想受容の一面を管見してきたわけであるが、本文の成立年代については紙幅の都合上触れることができなかった。全体の訳文とあわせて、別の機会に報告したいと思う。

- 1 中村元「阿弥陀経チベット訳について」(『岩井博士古稀記念論集』)、香川孝雄「チベット訳『無量寿経』解題」(『梵蔵和英合璧浄土三部経』)など。
- 2 「チベット訳無量寿経の敦煌新出異訳本について」(『仏教文化研究所紀要』23)、「チベット訳阿弥陀経の異本—敦煌写本 P. tib. 758 に ついて」(『印仏研』33—1)。
- 3 藤田宏達『原始浄土思想の研究』三〇六—三一〇頁。
- 4 香川孝雄『無量寿経の諸本对照研究』一九八—一九九頁。
- 5 『大正蔵』一二卷、三四三頁中—下。
- 6 『講座・大乘仏教7—中観思想』ほか。
- 7 藤田宏達、前掲書、五四五—五四七頁。
- 8 『大正蔵』一二卷、三四五頁下—三四六頁上。

(龍谷大学大学院修了)